

10. 木曾三川周辺地域における災害伝承・災害文化と住民意識との関係 ：愛知県一宮市起地区・朝日地区を事例に

橋本操・小池則満・佐藤野々花

1. 研究の背景と目的

2018年の西日本豪雨や2019年10月の令和元年東日本台風など、近年全国的に河川における洪水災害が頻発している。こうした近年の自然災害に対し、過去の自然災害による経験から被災を免れた事例が多々見られることから、2021年6月より国土地理院では「自然災害伝承碑」の地図記号が新しく地形図等に標記されるようになった（国土地理院<https://www.gsi.go.jp/bousaichiri/denshouhi.html>）。また、学校教育現場でも、自然災害から身を守るための教育が見直されており、2022年度に高等学校で「地理総合」が必修化される中、「防災教育」が盛り込まれることになっており、そこにつながる小学校・中学校の義務教育の中においても「命を守る防災教育」が求められている。

先行研究には、災害と関連する水神などの神社等の祭神の立地特性や地域の災害との関連性について調べた研究（例えば、高田ほか2012；櫻田ほか2020など）、災害伝承や災害文化を教材として用いた防災教育に関する研究（例えば、桜井ほか2020；弘胤2020；國原2020など）等がみられる。しかしながら、災害伝承とそれらが伝わる地域の地域住民の防災意識との関連については研究の蓄積が求められる。

以上を踏まえ、本研究は木曾三川周辺地域を対象に、地域に伝わる災害伝承について調べるとともに、地域住民の洪水災害に対する意識調査を行い、地域防災の現状と災害伝承が地域住民の災害意識に与える影響や課題について明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

郷土資料や、国土交通省木曾川下流河川事務所が発行している「KISSO」等の資料を基に、木曾三川における災害伝承について情報を収集した。これを基に、災害伝承が多く残る木曾川周辺地域である愛知県一宮市の西側に位置する旧尾西市の範囲から対象地域を選定することにした。2015年度国勢調査の人口データより、65歳以上の人口の割合が高く、古くから住む住民が多いと思われる地域として、愛知県一宮市起地区、朝日地区を対象地域として選定した。

次いで、一宮市総合政策部危機管理課へ聞き取り調査を実施し、一宮市の洪水対策やハザードマップ、起地区、朝日地区の町内会の世帯数等の情報を収集し、町内会長を紹介いただいた。さらに、一宮市博物館の学芸員、尾西歴史資料館の学芸員へ、一宮市の洪水災害の歴史、災害伝承に関する聞き取り調査を実施した。

一宮市役所の資料より、起地区(310世帯)、朝日地区(341世帯)に洪水災害への意識と災害伝承に関するアンケート調査を実施した。アンケート調査票と返信封筒は、ポスティング形式で配布し、郵送により回収した（アンケート調査期間：2021年10月18日～10月31日）。そして、アンケート調査結果より、各地区の洪水に関する災害伝承と防災意識との関係について分析することで、地域防災の現状と災害伝承が地域住民の災害意識へ与える影響や課題を考察した。

3. 対象地域の洪水の歴史と洪水に関する災害伝承

対象地域である起地区と朝日地区は、一宮市の南西に位置し、尾西市が2005年に一宮市に併合されたことから、一宮市になった地区である(図1)。旧尾西市では、古くは650(大化5)年に西濃柏川の大洪水の記録があり、度々洪水災害に見舞われてきた(朝日村誌編集委員1963;起町役場1955;尾西市文化財審議会1975)。それらの中で

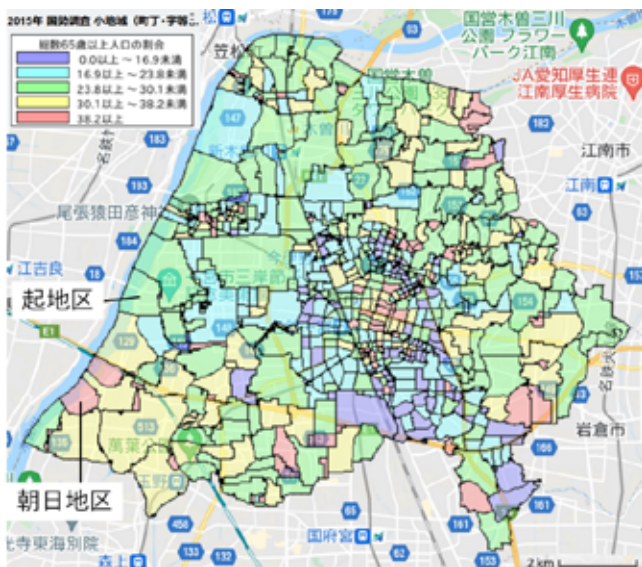


図1 対象地域

最も新しく大きな洪水災害が、1961(昭和36)年梅雨前線豪雨(以下、三六災害とする)である。三六災害は、1961年6月24日～7月10日にかけての大雨による洪水災害であり、その後60年経過し、その経験がいまだに地域住民の記憶に残っている。

このように一宮市では、洪水災害が頻発していたことから、洪水災害に関する伝承が多く残っている。起地区では、慶長期(1596～1615年)に、木曾川の分流小信川の築止難工事で、起小信の与三兵衛が人柱として濁流に身を投じたと言われている。この与三兵衛と濃尾大橋建設工事(1955年)の犠牲者3名を供養するため「起の人柱観音」が祀られている。朝日地区には、木曾川千間切れの人柱になった定七を祀った「定七宮」があったが、

1924(大正13)年に天神神社に合祀されたことにより、その存在は不明になっており、現在、由来等の看板等は残っていない。また、朝日地区には、昔、木曾川付近の村人に助けられた小さな竜が、大洪水の際に村の人々を岸まで運んだ、という伝承など「竜神」と洪水災害に関係する伝承が残っている。

4. 洪水に対する防災意識と災害伝承に関するアンケート調査

3.で示した通り、起地区、朝日地区には洪水災害に関する災害伝承がいくつも残っており、地域住民の洪水災害への意識が高いのではないかと仮説を立て、洪水災害に関する地域防災の現状や、災害伝承の認識と洪水災害に対する意識についてアンケート調査を実施した。アンケート調査項目は、①属性(回答者の性別、年齢、職業、世帯構成、出身、居住歴)、②各地区での洪水災害の経験と洪水対策、③各地区における洪水の災害伝承

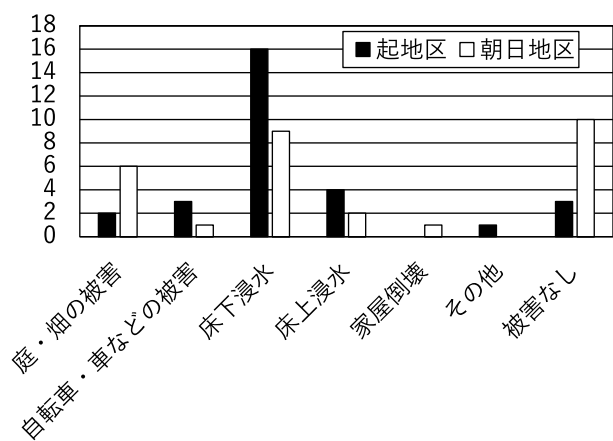


図2 洪水被害状況(複数回答)

についての認識、④各地区に残る災害伝承の資料を読む前後での意識の変化、⑤洪水の災害伝承の継承や防災教育への活用方法、を設定した。

起地区は310世帯に配布し、107世帯から回収(回収率34.5%)、朝日地区は341世帯に配布し、98世帯から回収(回収率28.7%)した。

起地区の回答者は、男性62人(58%)、女性43人(40%)、不明2名(2%)、20～30代4人、40～50代30人、60～70代以上72人、不明1人、一人暮らし16人、夫婦二人暮らし33人、親と子の二世帯38人、親・子・孫の三世帯12人、その他6人、

不明2人、起地区出身57人、一宮市出身23人、市外26人、不明1人、居住歴が60年未満63人、60年以上44人であった。朝日地区の回答者は、男性63人(65%)、女性34人(35%)、20~30代7人、40~50代25人、60~70代以上65人、一人暮らし17人、夫婦二人暮らし28人、親と子の二世帯35人、親・子・孫の三世帯10人、その他7人、朝日地区出身62人、一宮市出身22人、市外13人、居住歴が60年未満66人、60年以上31人であった。

洪水災害の経験の有無は、起地区23人、朝日地区16人で、どちらも40代以上であった。洪水被害の内容は、床上浸水が最も多く起地区16人、朝日地区9人であった。床上浸水は、起地区で4人、朝日地区で2人、家屋の倒壊は起地区0人、朝日地区1人、庭・畑の被害は起地区2人、朝日地区6人、自転車・車などの被害は起地区3人、朝日地区1人であった(図2)。

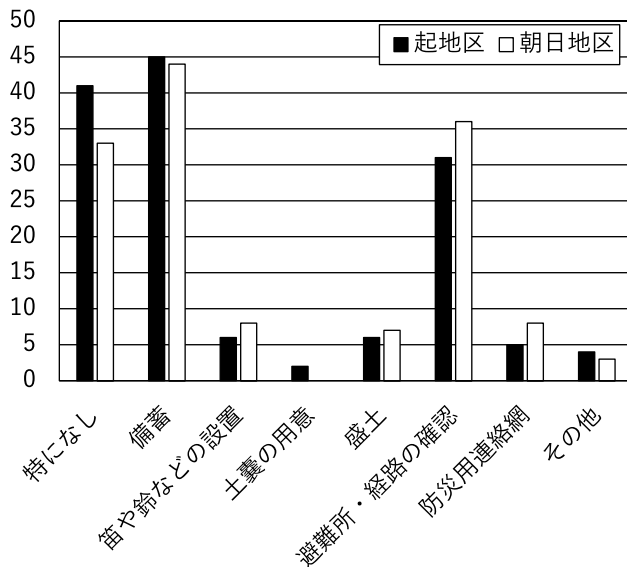


図3 洪水対策 (複数回答)

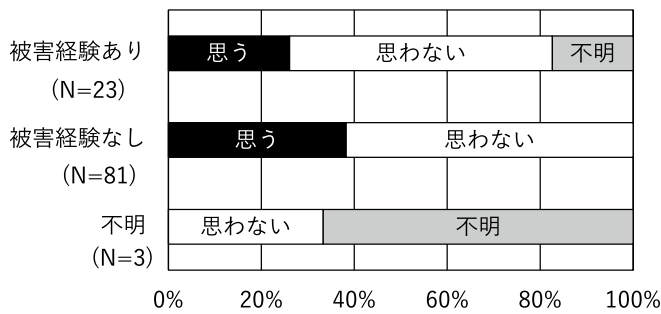


図4 起地区における被害経験の有無と地区に対する洪水災害の危険性の意識

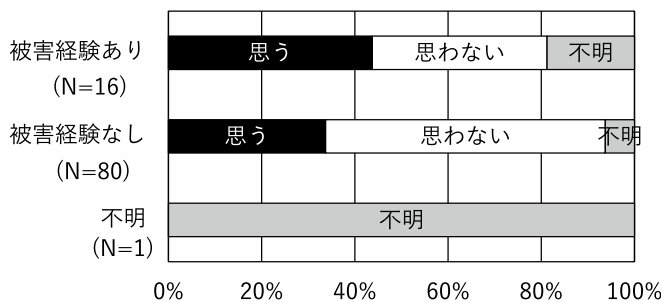


図5 朝日地区における被害経験の有無と地区に対する洪水災害の危険性の意識

被災は起地区0人、朝日地区1人、庭・畑の被害は起地区2人、朝日地区6人、自転車・車などの被害は起地区3人、朝日地区1人であった(図2)。

洪水災害への対策としては、備蓄が最も多く(起地区45人、朝日地区44人)、次いで避難所・経路の確認(起地区31人、朝日地区36人)、特になし(起地区41人、朝日地区33人)となっており、地震災害等と併用できるような対策は実施しているものの、洪水災害の対策は不十分であることが示された(図3)。

被害経験の有無と居住地区に対する洪水被害への意識とのクロス集計を行い、 χ^2 検定を実施したところ、起地区、朝日地区共に、被害経験の有無により、居住地域に対し洪水の危険性があると思う割合には差があると言え、被害経験がある人の方が、居住地区に対し洪水災害の危険性がないと思う割合が、被害経験がない人に比べ低い傾向があることが指摘できた(起地区： χ^2 値=32.4630096582089, 自由度4, P値=0.000...<0.05, 朝日地区： χ^2 値=13.7178921568627, 自由度4, P値=0.00825...<0.05, 図4、5)。しかし、被害経験があるものの、居住地区に対し洪水災害の危険性がない、と考えている人が多いことがわかった。

各地区の災害伝承について知っているか尋ねたところ、起地区は81%、朝日地区は6%の人が知っている、と回答していた。さらに、各地区の災害伝承に対して興味があるか尋ねたところ、起地区は64%、朝日地区は41%の人が興味がある、と回答していた。これらから、各地区で災害伝承に対する認知に差があることがわかった。起地区は、「起の人柱観音」が身近にあり、例年観音像を祀る催事が行われていることから、「起の人柱観音」を認知している人が多いことが考えられる。一方、朝

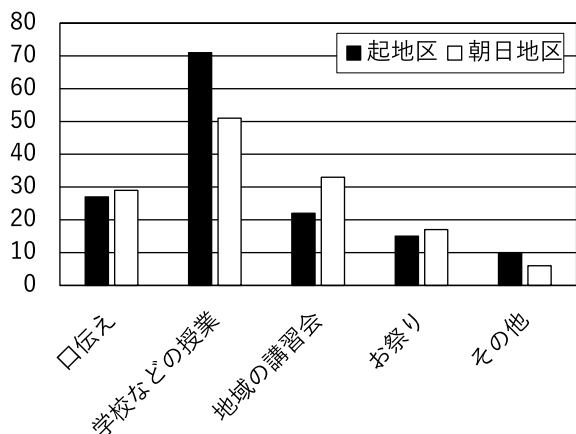


図6 伝承の継承方法（複数回答）

日地区は、災害伝承にまつわる史跡等は残されていないため、災害伝承を認知している人が少ないことがうかがえた。

各地区の伝承に関する資料を読んで、伝承は洪水災害の意識を高めることに役立つと思うか尋ねたところ、起地区は64%、朝日地区は50%が役立つと思う、と回答していた。また、各地区の伝承に関する資料を読んで、伝承を継承する意向について尋ねたところ、起地区は84%、朝日地区は71%が継承したいと思う、と回答していた。伝承をどのように伝えるべきか複数回答で尋ねたところ、学校などの授業が最も多かった（起地区71人、朝日地区51人；図6）。

5. まとめ

以上より、地域防災の現状と災害伝承が地域住民の災害意識に与える影響や課題については、以下の点が明らかとなった。

- 1) 被災経験がある方が災害への意識は高いものの、被災経験の有無に関わらず、洪水災害への意識が低く、洪水災害の対策はあまり実施されていない。これは、大きな洪水災害から60年経過しており、堤防があるため河川の決壊よりも内水氾濫のリスクの方が懸念されていることが考えられる。
- 2) 伝承は災害碑のように目に見える形で残されている方が認知されやすく、後世に残っていきやすい。起地区のように災害伝承に関わる観音像や災害碑が残っている地区の方が、過去の災害からの教訓が伝わっており、災害に対する意識も高くなることが示された。
- 3) 地域の災害伝承の継承は、学校での防災教育での期待が高い。防災教育では、災害伝承を導入として使用し、災害のメカニズムや災害の歴史、災害対策、と併用した活用が重要である。また、災害伝承は、地域学習や地域の災害の歴史を知る動機付けとして意義があると言える。

文献

朝日村誌編集委員1963.『朝日村誌』岩田宗十郎.

起町役場1955.『起町史 下巻』起町役場.

國原幸一朗2020. 社会科・地理の防災学習における災害文化—名古屋市の水害の教材化を事例として—. 災害文化研究 (4) : 4 - 16.

国土地理院<https://www.gsi.go.jp/bousaichiri/denshouhi.html> (最終閲覧日2022年5月7日)

桜井愛子・佐藤健・北浦早苗・村山良之・柴山明寛2020. 津波記録を活用した被災地の学校での防災教育—災害伝承と命を守る防災教育の推進に向けて—. 防災教育学研究 1 (1) : 53 - 65.

櫻田歩夢・西山浩司・清野聡子2020. 福岡県東峰村に立地する水神と災害との関連性. 自然災害科学39 (2) : 137 - 155.

高田知紀・梅津喜美夫・桑子敏雄2012. 東日本大震災の津波被害における神社の祭神とその空間的配置に関する研究. 土木学会論文集F 6 (安全問題) 68 (2) : I_167 - I_174.

尾西市文化財審議会1975.『尾西市史 資料 起宿交通編』尾西市教育委員会.

弘胤佑2020. 水害碑を活用した防災教育—歴史学の視角をふまえて—. 地理科学75 (3) 184 - 194.